



Title	イクバル「ムスリムの生活について」（翻訳）
Author(s)	Iqbal, Muhammad; 松村, 耕光
Citation	大阪外国語大学学報. 1984, 67, p. 147-160
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81030
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

イクバル「ムスリムの生活について」(翻訳)

松 村 耕 光

A Japanese Translation of Muhammad Iqbal's Essay "Qaumī Zindagī"

Takamitsu Matsumura

訳者序

ここに訳出したムハンマド・イクバル (Muhammad Iqbāl, 1877—1938) のエッセイ “Qaumī Zindagī” は、雑誌『宝庫』 (Makhzan) の1904年10月号と1905年3月号に分載されたもので、ヨーロッパ留学以前の初期イクバルの文学・思想を知る上できわめて重要な資料となるものである。(イクバルは1905年9月、ヨーロッパへ留学し、イギリス、ドイツの大学で学んだ後、1908年7月に帰国した。)

このエッセイについては Hafeez Malik の短いが示唆に富む論文がある。

Hafeez Malik, “The Impact of Ecology on Iqbal's Thought” in *Iqbal Review*, Oct. 1968, Vol. IX, No. 3, The Iqbal Academy, Karachi.

これには “Qaumī Zindagī” の英訳が付されているが、誤訳や脱落がある。

尚、イクバルは nation, community 両方の意味で qaum という語を用いているが、適当な訳語がないため、民族 (宗教集団) あるいは単に民族または宗教集団と訳してある。ムスリムを意味している場合にはムスリムと訳した箇所もある。

訳者による補註は () で示した。

訳

ムスリムの生活について

我々の親愛なる友人シャイク・ムハンマド・イクバル修士は、夏期休暇中に、アボッターバードのサブ・ディヴィジョナル・オフィサーである御尊兄シャイク・アター・ムハンマド氏

の許に赴かれた。同地の名士達はイクバル氏に講演を懇願した。その講演の要旨を読者諸賢の御高覧に供したいと思う。

諸民族(宗教集団)の歴史において現在は非常に重大な時期である。現代においては、各民族(宗教集団)はそれぞれの現状に注意を払うだけでなく、もし世界の諸民族(宗教集団)の中に自分の名を存続させたいと思うなら、次代の繁栄をも現在の問題とし、子孫の文化もその影響範囲に含むような措置をとらなければならない。昔は、世界諸民族(宗教集団)の相互対立の帰趨は剣によって決しられ、この鉄の武器は古代世界史において強大な力を振るったものであった。しかし、現代は不思議な時代であり、諸民族(宗教集団)の存続はその成員の数、その腕の力、その鉄の武器によらず、その生存はペン(qalam)と呼ばれる木製の剣に基づいている。現代の戦争においては、諸民族(宗教集団)は武装し、戦場に陣をしき、戦闘を繰り広げたりしなくてもよい。また、現代においては、隣の民族(宗教集団)に勝つために隣国を攻撃する必要もない。このようなことは全て古代に特有のことである。我々の時代においては、別箇の静かな力が働いている。諸民族(宗教集団)の存亡はこの力に掛かっており、その力によって民族(宗教集団)はいながらにして他の民族(宗教集団)を永久に世界の頁から誤字を消すように消し去ることができる。手の闘いの時代は過ぎ去った。今や頭脳、文化、文明の闘いの時代である。この戦争は、どのような膏藥でも負傷者が決してよくならないような戦争である。アレクサンドロスの作った防壁¹⁾のように諸民族(宗教集団)の交流を阻んでいた地理的な隔たりは、鉄道や電信の驚くべき発明によって全く取るに足らないものになってしまったと言える。無限の大海のために互いの存在すら知らなかった国と国は、今世紀における航海術の驚嘆すべき進歩のおかげで一つの都市の二つの居住区ようになってしまったかのようである。こうして世界の各民族(宗教集団)は他民族(宗教集団)の文化・文明の影響を日々受けるようになっていく。文明の初期の段階においてはその煌きが人間の心に宗教的な感銘を与えていた電気も、今では人間の言葉を伝える役割を果たしている。蒸気が人間の乗り物であり、空気がファンを回している。太陽の偉大さはアブラハムの慧眼を欺いただけでなく²⁾、或る文明の民の精神にも影響を与えたが、その太陽は今では人間の指図に従って熱と光を発している。要するに、その不可思議な作用を恐れて古代の諸民族(宗教集団)が神性の衣を纏わせ、壮大な礼拝所を建設していた自然の強大な力は、全て、現代科学のおかげで人間の忠実な奴隷となっているのである。この不義で無知な者(人間のこと)は、山ですら担ぐのを拒んだ大きな荷物を担ぎ、自分が被造物の長(ashraf al-makhlūqāt)であることを正当にも誇りにしている³⁾。その好奇心に燃えた視線は自然の隠れた秘密を明らかにしつつある。そしてその頭脳はそのような知的征服に基づいて、山、海、川、そして月、太陽、星すら支配している。これこそ現代を過去から区別する驚嘆すべき変化であり、このために、あらゆる民族(宗教集団)は新しい精神的・肉体的必要の発生の故に、自己の生存のための新しい手段を編み出す必要に迫られている。私が望んでいるのは、以上のような変化を念頭に置いてインドの諸宗教集団

(aqwām-e Hindustān), 特にムスリムの現状に目を向けること, そして生の難路において我々はどうのような困難に直面しているのか, それらを克服するにはどのような手段を講じたらよいのか, という点を明らかにすることである。私の主たる目的は, 読者の関心を民族(宗教集団)の営みにとって重要かつ不可欠な問題に向けることにある。もし, 読者の内御一人でもこの重要な問題について考えてみようという気になっていただければ, この小論は無駄ではなかったことになる。

自然界の諸現象の観察を通じて, 学者達は, 生命の様々な形態, すなわち人間, 動物, 植物等の間で一種の全面戦争が生じている, との結論に到達している。あたかも自然界とは生命の痛ましい闘争の場であるかのようなのである。各種の生物がその隣の生物と闘争を行なっている。この生存競争に勝利を収めようとしてあらゆる生物は懸命である。しかし, 勝利を収めるのは, 生存する能力のある種, すなわち変化した生活環境に適応した種だけである。数百種類もの風変わりな四足動物や鳥がかつて地表や海中に生棲していた。しかし, 今やその跡すら残っていない。生活環境や生存条件が変化するにつれてこれらの生物は死滅していったが, それは変化の各段階において環境に適応できなかったからなのである。現代の学者達が大変な努力によって発見したこの法則は, 一つの普遍的な法則である。人間, 動物, 鳥類, 植物, 要するに生あるものでこの法則の支配を受けないものは一つとして存在しない。私がこれから示したいと思うのは, この絶対的な法則が人間の進歩, 発展に対してどのように作用したか, また, 現在作用しつつあるか, ということである。現在の人間は昔から現在のような姿をしていたのであろうか。否。人間, 現代の人間は生存競争で滅亡した, 諸民族(宗教集団)の偉大な文明・文化——それらは現在跡形もないほど完全に滅亡してしまった——の形見である。エジプトのピラミッドの建設者達が死んで数千年になる。ギリシアのプラトン主義者や逍遙学派の哲学は残ったが, その民族の痕跡すらこの世界には残っていない。アフリカのあの強大な民族(カルタゴ人のこと)は今どこにいる。その勇敢な軍人達は西欧諸国を侵略し, ローマ人の大帝国を攻撃したのだが。この民族のことを思い出させる物が一つでも残っているだろうか。数百もの民族(宗教集団)が誕生し, 繁栄し, そして最後には上記の絶対的な法則の作用のために土へと帰って行った。人類の現在の繁栄は, 以上のことから分るように, 決して安い代価で得られたものではない。数百もの民族(宗教集団)が知的・文化的進歩の美しい女神のために犠牲となり, 数千もの人の血がその恐るべき祭壇で流されている。戦争, 疫病, 飢饉はこの普遍的な法則の作用が顕在化したものである。それらを人類進歩の観点から見ると天災に思えるような現象も, 人間にとっては天恵であり, 自然の秩序を整えるためには是非とも必要なものである。この法則の影響は人間の諸民族(宗教集団)の間に止どまるものではない。存在界の如何なる領域に目を向けてみても, その支配が目に入るであろう。数百もの宗教が世界に誕生し, 成長し, 開花し, そして遂には消えていった。何故か。人間の知的進歩に伴って現われてきた新たな精神的必要を, これらの宗教の原理は満たすことができなかったからである。まさにこの故に, 宗教家達は時折新しい神学を生み出

する必要に迫られたのである。新しい神学の原則から彼らは自分達の宗教を検討し、現実生活においても精神生活においても人間の指針となるような形で自分達の宗教の教義を説こうと努めたのであった。ところで、ギリシア語、ラテン語、サンスクリット等が生きた言葉であった時代があった。しかし、これらの言語が生命を失って久しい。これらの言語の死の秘密は上記の法則の作用にあり、我々が日常用いているパンジャブ語もその影響を日々受けている。教養ある人々に日常用いられている単語でこの言語には見出せない単語が数百もある。知的進歩によって生まれた思想表現の新しい方法をこの言語は用いることができない。このような状態では、この言語の運命は古代諸語のそれと同じである他はない。現代の諸民族(宗教集団)に目を向けてみると、アメリカやオーストラリアの原住民がより高度な文化・文明の洪水を前にしてほとんど死滅してしまっただけが分るであろう。アジア諸国においては中国人、イラン人、そして中央アジア諸民族がこの法則の作用を日々受けている。識者達の見解では、これらの諸民族の将来はきわめて暗い。以上のことから分るのは、人類進歩のためには生存競争が必要であるということであり、一本の若木が実を結ぶのは数千の苗木がその成長のために熱風の犠牲となる場合だけであるということである。人類全体の進歩のために様々な民族(宗教集団)の滅亡が必要であるように、民族(宗教集団)の発展のためには幾人かの人が命を落とす必要がある。また、民族(宗教集団)の進歩のためには個人の私的権利が無視されることも必要である。しかし、ここで一つの奇妙な、そして難解な問題が生じる。個人に民族(宗教集団)の次代の繁栄、栄光、知的・文化的発展について何の関心もなければ、どうして自分の私的権利より民族(宗教集団)の発展を重視することがあろうか。私は百年後生きているだろうか。否。ではどうして自分を民族(宗教集団)のために犠牲にし、民族(宗教集団)の将来の繁栄のために自らに睡眠を禁じ、夢を見ることもなく夜を過ごさなければならないのか。これは人を悩ませる問題である。どの民族(宗教集団)の成員の心にも生じ得る問題であるが、これに対する合理的な解答を我々は持っていない。しかし、この危険な懐疑の時、宗教は救いの手を差し延べ、我々にこう教える——自己犠牲、すなわち他者の利益を自分の私的利益に優先させる行為は理性に基づいているのではなく、人類と民族(宗教集団)の進歩にとってきわめて重要なこの美德は超自然的原則(fauq al-‘ādat uṣūl)に基づいているのである、と。預言の声の真の力、その真の偉大さは合理的な論証に基づくのではなく、神秘的な体験に基づいている。預言者は不可思議な力によってそれを体験し、その体験のおかげで預言者の声には神聖な無限の力が生まれるのである。その前では人間の力など取るに足らないものである。これこそ宗教出現の本当の秘密であるが、考えの浅い者達はこれを理解せず、誤って宗教原理を殺戮や世界大戦の動因であると考えたのであった。自己犠牲の本質もまた同じである。世界の全民族(宗教集団)は時に応じて、様々な形で犠牲を払った。明敏な者は知っていることであるが、もし、人間の諸集団に犠牲が教えられていなかったら、疑いなく、人類発展の流れは途絶え、今日あるような文化・文明の姿はなかったであろう。人間の文化・文明の発展を一本の木に譬えるならば、宗教はその果実であると言うことができよう。しかもこれはただの果実

ではなく、水、空気、食物が肉体の存続に必要であるように、この果実を食べることは民族（宗教集団）の営みにとって不可欠なのである。宗教は犠牲を教えるという点で人間の進歩に役立つばかりでなく、他にも無視できない面がある。識者には既知のことであるが、古代には奴隷制は人間文明の不可欠の要素であると考えられていた。プラトンのような哲学者ですら奴隷制をその著書『国家』の中で正当であるとしている。これが正当視されたのには一つの理由がある。当時、誰かに報酬を出して仕事をさせるなどということを人々は思い付きもしなかった。労働は自由な契約によるものとは考えられなかったのである。文明の体制は労働の原則なしでは成立しないから、奴隷制を正当化することが必要となった。その結果、非常に多くの人達は生命のない品物と同じような所有物と考えられるようになり、人類の進歩にとってきわめて重要な自由な競争の場から排除されてしまったのである。最初にアラビアの預言者（マホメットのこと）が人間の天賦の自由を説き、奴隷と主人との権利は平等であると宣言し、文化革命の基礎を築いた。その成果を現在、全世界は感じている。それは、人類の大多数を自由な競争の場に連れ戻すことに他ならなかった。自由な競争によって文化・文明の高度な形態が生まれているが、自由な競争こそ世界の全文明の土台なのである。アラビアの賢者のこの素晴らしい教えの結果はどうなったであろうか。ムスリムの間では奴隷が王となり、大臣となった。奴隷にその教えが伝えられた。奴隷の中に哲学者や文学者が生まれた。恥ずべき差別が撤廃されたので、どの奴隷も名門出身者と知的競争を行なうことができ、競争に勝てば帝国の最高の地位に就くことができた。上記の教えの最も良い例はファールーク（Fārūq 識別者の意。第2代カリフ、ウマルのこと）によって示された。エルサレム攻撃中のことである。私の知る限り、世界の如何なる民族（宗教集団）の歴史もこのような例を示すことができない。ムスリムがこの教えをどれほど自慢しようとそれは正当なのである。また、女性の権利という厄介な問題があるが、これに関してもアラビアの賢者は自由を説いた。しかし、これはきわめて広範囲にわたり、また、論議を呼ぶ問題であるから、ここでは取り扱わないことにする。ただし、必要な所では簡単に言及することにしたい。

生存条件についてさらに注意すべきことがある。民族（宗教集団）の生存を支えている諸要素は全て人間の努力によって特定の形に組織化され得るのであるだろうか。換言すれば、民族（宗教集団）の生命は民族（宗教集団）の手中にあるのであるだろうか。それとも、植物や動物のように、人間の生命もまた自然力の制御できない作用に依存しているのであるだろうか。被造物としての生の本質は欺くの如きものであるにしても、人間は神から授けられた理性の故に他の如何なる被造物とも異なっている。アッラーは人間に、生存条件を理解し、どのような変化が起こってもその諸要因を考察できるような力を与えて下さったのである。人間の把握力は実に素晴らしいもので、人間は自然の強大な力を理解し、利用することができる。また、自分で自分の発展の方向を決定することができるのである。人口増加に伴って収穫率が自然の諸要素のために低下するのを見ると、人間はそれらの要素と格闘し、各種の発明によって自然の諸要素の敵対を停止させ、生活の糧を作り出す。もし人間に理性が備わっていなかったならば、文化・文明の進歩のために努力するの

は全く無益であったことであろう。我々の一生は動物や木と同じようなものであったことであろう。我々は変化に対応することができず、我々の運命は自然の諸要素に左右され、それらの力の前では我々は全く無力であったことであろう。

これまで私は生存条件について概ね理論的に論じてきた。これからは具体的事例について述べ、我が国の人々やムスリム (qaum) にとって実際面で役立つような結論を引き出したいと思う。文明世界の過去や現代の歴史を見るならば、古代諸民族 (宗教集団) の内では四つの民族 (宗教集団) だけが生の法則の鋭い刃を逃れてどうにかこうにか現在でも存在界に残っていることが分る。すなわち、中国人、ヒンドゥー、イスラエルの子孫 (ユダヤ人のこと) そしてパルスィー (拝火教徒) である。現代の諸民族の内では、西欧諸民族の他、アジアでは日本人、西欧ではイタリア人の二つの民族が現今の変化の意義を理解し、自分達の文化的、道徳的、政治的状态を変化に適応させようとした。ヒンドゥー、中国人の民族 (宗教集団) としての生活条件は、イスラエルの子孫やパルスィーのそれと全く異なっており、また、当面の問題について我々に何ら実際の利益をもたらすものでもないで、この二つの民族 (宗教集団) の興味ある、そして驚嘆すべき物語には言及しないことにする。以上の民族 (宗教集団) はいずれも民族 (宗教集団) の営みが持つ真の意義を理解していないが、たびたび彼らの国に加えられた外敵の攻撃にもかかわらず、また、これらの民族 (宗教集団) が耐え忍ばなければならなかった数百年に及ぶ隷属やその他の人災、天災にもかかわらず、今まで生き残ってきたのは驚くべきことである。イスラエルの子孫の歴史は苦しみに満ちた物語であり、情け深い心の持ち主はそれを聞くことすらできない。しかし、この民族にはその天与の能力の点で驚くべきものがあり、ヒンドゥーの他に東西の民族 (宗教集団) でこの民族と肩を並べることのできるものはいない。世界最初の法の施行者、完全なる一神論 (tauhīd-e mutlaq) の最初の教師はモーセであった。また、現代において存在の唯一性 (tauhīd-e wujūd) を最初に説いた者もオランダのユダヤ人であった。事物の本質についてのこの二つの教義は、一見矛盾しているかのようであるが、世界の文化・文明において最も大きな力を持っている。これらが同じ民族の頭からどのようにして生まれたのか、驚くべきことである。存在の唯一性の問題は、ヤベテの子孫のアジアにおける一派、すなわちヒンドゥーの間で驚くほど突き詰められていたが、オランダのユダヤ人、つまりスピノザの教説はヴェーダーンタの深遠な哲学から全く影響を受けていないと確信をもって言うことができる。数百名もの預言者がこの選民の間に生まれ、数百名もの王や数千名もの法学者が生まれた。彼らは自民族の文化、文明を完成の極に至らしめた。しかし、神の怒りが生の法則という形をとって降り懸かった。この民族は隷属という恐るべき不幸に襲われ、そして国を追われた。栄光、帝国、名声、文化・文明は失われた。すなわち、哀れむべき姿となって西欧諸国に四散し、現在もなお他民族による抑圧を耐え忍んでいる。確かに、この民族の一つの分派、すなわちアフガン人はアジアの山岳地帯に独立国を築いてはいる。しかし、諸民族の栄枯盛衰の原因について考察する者は知っていることであるが、もし、アフガン人が当今の一大変化の意義を理解することなく、その独立主権を文化面で

活用しなかったならば、必ずや現在の中央アジア諸民族が陥っているのと同様の状態に陥ることであろう。イスラエルの子孫達は、時代のために数々の不幸を耐え忍ばなければならなかったが、驚くべきことに、この民族は今なお存在している。民族性や国家は失われたが、経済的には世界の大国ですらこの民族に対して債務を負っている。この民族はずっと以前からこの富によってオスマン帝国から先祖の土地を買い取り、過去の栄光を再び築こうという計画の実現に余念がない。ユダヤ人の次にパールシーの歴史に目を転じてみよう。かつては強大な民族であり、ユダヤ人同様、この民族にも預言者が生まれたものであった。ケヤーン朝の文明は頂点を極めた。ヤズィダジィルド王の時代、アラブの剣はケヤーン朝以来の文化の伝統を世界から消し去った。拝火教神官の声は永久に沈黙した。拝火神殿は廃墟となり、ゾロアスターの弟子達は国を追われてインドに逃れた。しかし、この民族は存在界から消え去ってしまったであろうか。実のところ、上記の二民族は、産業と商業にその最大の特徴がある一大変化の意義を或る程度まで理解したのであった。世界商業の大部分は彼らの手中にある。これこそ彼らが復興した原因である⁴⁾。現代諸民族の中で、西欧人であるイタリア人は別にして、日本人に注目する必要がある。何と驚くべき速度で進歩しつつあることか。3、40年前にはこの民族はほとんど生命を失っていた。1868年、日本に最初の教育会議 (ta'limi majlis) が設立され、その4年後、すなわち1872年には日本最初の教育法 (学制) が施行された。天皇はその施行に際してこう述べた。「今より日本国に教育が普及し、この島国のどの村からも無学な家庭がなくなることを望む」と。36年という短期間の内に、宗教的にはインドの弟子であった極東のこの明敏な民族は、世俗的な面では西欧諸国の真似をして進歩の実を挙げた。今日、世界で最も文明化した民族の一つに数えられており、西欧の学者達はその進歩の速度を見て驚いている。日本人の明敏な眼は、大変動の本質を見抜き、民族の存続にとって必要であった方策をとった。人々の精神は一変し、教育と文化改革は民族を変貌させた。アジア諸国の中で日本は生の秘密を最もよく理解している。したがって、この国は世俗の見地から見て我々にとって最もよい手本である。この国の急激な変化の諸原因を考察すること、そして我が国の状況に照らして可能かつ適当な限りこの島国を模倣することが必要である。

このような状況を念頭に置いてインドの状態を見ると、嘆かわしい光景が目の前に現われる。我が国は自分の足で立っているであろうか。自分の家の家具類を見れば、ありふれた物でも我々は他民族に依存しており、日に日に依存の度を強めていることが分るであろう。ランプはドイツで作られたものであり、その火屋はオーストラリアで作られたものである。油はロシアからもたらされ、ランプに火を灯すマッチはスウェーデンか日本から輸入されたものである。居間の壁に掛かっている時計はアメリカの工場で作られた。ポケットの中でこちこち音を立てている小さな時計はジェノヴァの職人達の技巧の結晶である。また、服に使う布地、手にしている杖、ナイフ、鋏、戸口の簾、日常用いられる数百もの品々は外国の工場で作られ、手元に送り届けられたものである。このような状況のもとで、産業、商業に対して我が国が全く無関心でいるなら、その範囲が日に日に拡大している生存競争において我々はどうして勝利することができるであろう

か。確かに、我が国から綿花、紅茶、石炭等の原料が外国に輸出されてはいる。しかし、考えてみれば分るように、不幸にして他の国々に対する原料の供給地であり、加工品を他の国々に頼っているような国、インドのように農業にのみ依存しているような国は、発展の競争に勝つことができないし、飢饉や疫病から逃れることもできない。住民の必要を満たす何か他の方法を講じない限り、インドが産業国となり、我々が日本人同様自立しない限り、天は我々に対して飢饉の鞭を振るい続けるであろうし、数々の疫病が我々を苦しめ続けることであろう。そして我々は肉体的、道徳的に衰弱してゆくことであろう。インド諸宗教集団(aqwām-e Hind)の内、我々の同胞ヒンドゥーは、この秘密を或る程度理解した。気質的にもこの方面に向いているので、明らかに彼らの前には発展の道が開けている。しかし、私は残念ながらこう言わなければならない。この点からムスリムを見るなら、その状態はきわめて憂慮すべきものに思える、と。この不幸な宗教集団(qaum)は、政権を失い、産業を失い、商業を失い、今や時代の要請を知らず、貧困の鋭い刃に傷ついて無意味な宿命論(tawakkul)の虜となっている。他のことはともかく、宗教論争ですら結着を見ていないのである。日々新しい分派が生まれ、自分達こそ天国の相続人⁵⁾であると考えて他の人類全てを地獄の燃料と呼んで憚らない。このような分派活動は最高の共同体の団結を大いに乱し、共同一致の姿は全く見られない。

宗教指導者達は次のような有様である。もし、どこかの町に偶然二人の宗教指導者がいたとすれば、イエスの生涯や対立するコーランの章句について議論するために互いに挑戦状を送りつけるであろうし、もし、論争が起これと——普通起これのだが——目も当てられないような状態になってしまう。イスラームの学者に特有であった昔日の学識や威厳は全く見られない。もっとも、ムスリムの不信心者の名簿があり、それに彼らは手ずから毎日名を付け加えている。上流階級の贅沢三昧の物語は実に変わっている。幸運にも四人の娘と二人の息子を授かっていても、旦那様は三人目の妻を探し、二人の妻に隠れてそこかしこに書状を送っている。家庭争議が一段落しても、パーザールの美女とかりそめの恋を楽しんだりする。誰にも旦那様に忠告する勇氣はなく、また、たとえ勇氣を奮い起こして口を開いたとしても、旦那様は眉をしかめてこうおっしゃるだけである。「他人の疝気を頭痛に病むな」と。民衆については何をか言わんやである。或る者は一生をかけて貯めた金を子供の割礼式に使ってしまい、或る者は(…) ⁶⁾教師に対する恐れのために自分の愛児に学習させようとしな。また或る者はその日に稼いだ金を夕方には使いはたし、明日のことはアッラーの思召しようそぶいて心を慰めている。或る所では些細なことで裁判が行なわれ、また或る所では財産争いで財産が失われていく。要するに一つ一つ嘆いていてはきりがな。いほど誰も彼も悪習に染まっているのである。文化の状態はと言えば、女子は無学、青年は無知で職を得ていない。産業を嫌い、手仕事を恥ずべきものと考えている。結婚をめぐる裁判沙汰の数は日増しに増加し、犯罪の数も日を追って増加している。頭はシャージャハーン帝なみなのに収入は少ない。貧困のあまり、「ムスリムにとって良い月は断食月^{ラマザン}」という有様。今は非常に重大な時期である。全ムスリム(qaum)が一致団結して精神の変革に関心を向けなければどうにもならないので

ある。大きな努力なしに成し遂げられた偉業は一つとしてない。神ですら、民族が自分で自分の状態を変えない限り、その民族の状態を変えたりなさらない⁷⁾のである。或る西欧人はこう書いている、「真面目に努力することは、その努力の影響が個人に止どまるものであれ、民族全体に及ぶものであれ、最大の礼拝行為である」と。しかし、少し注意してみれば分るように、個人の存在は民族（宗教集団）の存在を抜きにして考えることはできない。民族（宗教集団）全体に影響が及ばないような個人の行動はない。以上のことから推測できるように、各個人の努力は実際には民族（宗教集団）的なものなのである。努力の目的が卑しいものであれば、民族（宗教集団）に悪影響が及び、善いものであれば善い影響が及ぶであろう。民族（宗教集団）の成員の第一の義務は、民族（宗教集団）によって与えられた文化的目的を真摯に追求することであり、個人の盛衰は実際には民族（宗教集団）の盛衰であることを理解することである。これこそ礼拝と呼ばれる行為である。これに関して或るペルシアの詩人はこう歌っている。

努力なくして足は恋路を歩まず、

我が涙は心の血を吸って後流れることを知った⁸⁾。

民族（宗教集団）の諸成員がそれぞれ自己の改革に関心を向けない限り、この世の如何なる民族（宗教集団）の改革もあり得ない。何故なら、今述べたように、個人のあらゆる行為は実際には民族（宗教集団）に属する行為であるからである。個人の一生ですら個人のものではなく、民族（宗教集団）のものなのである。自殺は何故罪と考えられているのであろうか。一見したところでは、自殺という方法をとる者を罰するのは行き過ぎであるかのように思われる。しかし、これは表面的な物の考え方である。法律が原則として認めているところによれば、個人の生命は実際には民族（宗教集団）の生命なのであり、自殺する者は自分の生命に危害を加えているだけでなく、実際には、民族（宗教集団）の成員として体現している文化的な活力をも消滅させようとしているのである。

もし、日本の歴史から学ぼうと思うなら——現時点でこの国は我々にとって最良の手本である——二つのことがきわめて重要である。すなわち文化改革と教育の普及である。ムスリムにとって文化改革の問題は、事実上、宗教問題である。何故なら、イスラーム文化とは本質的にはイスラームという宗教が具体的な形をとったもののことであり、我々の文化生活には宗教の原則から自由であるような側面が一つとして存在しないからである。この重要な問題を宗教の面から論じようとは思わないが、生活環境に一大変化が起こったために、法学者達の論証——この全体が一般にイスラームのシャリーア（shari'ah 聖法）と呼ばれているわけであるが——これに再検討を迫るような文化的必要が生じていると言わなければならない。イスラームの是認された諸原則に何か内的欠陥があり、そのためにそれらは我々の現在の文化的必要に対応できない、と言うのではなく、私が言いたいのは、聖コーランやハディースの広範囲にわたる原則に基づいて法学者達が時に応じて行なってきた論証の大部分は、或る時代においては確かに適切かつ実行可能なものであったが、現在の要請には十分に応えることができない、ということである。シーア派の註釈

者達はいくつかの原則について驚くほど広い視野から註釈を行なったが、私の知る限り、イスラームのシャリーアに対してアブー・ハニーファが行なったような註釈を、イスラームの註釈者は一人として今日まで行っていない。もし、イスラームの観点から見て、彫像によって優れた学者達を記念するという慣習が正当であったなら、この偉大な法学者こそこの荣誉に輝く最初の人物であった。この宗教への奉仕、つまりシャリーアの哲学の註釈を通じて、「信者の長」アリーの後、この哲学者・指導者^{イマーム}が教えたことをムスリム (qaum) は決して忘れないであろう。しかし、現代の生活環境を考察すれば分るように、現在、我々は宗教原理の確証のために一つの新しい神学を必要としているが、同様にイスラーム法の新解釈のために一人の非常に優れた法学者をも必要としているのである。その者は豊かな知性と想像力を持つ者でなければならず、是認された諸原則に基づいてイスラーム法を新しい形に整えることができるだけでなく、想像力によって、(宗教) 原理に現代の文化的要請の有り得べきあらゆる形に適合できるような幅広さを与えることができる者でなければならない。私が知る限り、イスラーム世界には未だこのような優れた頭脳を持つ法学者は生まれておらず、この作業の重要性に鑑みると、この作業は恐らく多くの頭脳を必要とし、その達成のためには少なくとも一世紀を要するであろうと思われる。この問題は非常に興味深い、ムスリム (qaum) はまだ冷静にこの種の話聞くことができないから、私はこの議論を不本意ながら止めざるを得ない。

胸中を打ち明ける勇氣はない。

沈黙によって私は不満を表す⁹⁾。

(アーナンド・ラーム・ムクリス・ソーダルヴィー)

にもかかわらず、私はいくつかの文化的要請の方に読者の関心を向けたいと思う。そして、それらが十分検討されるのを期待したいと思う。文化改革に関する最も微妙な問題は、女性の権利の問題である。これに付随して他にも重大な問題、たとえば一夫多妻制、パルダ^{pardah} (女性隔離の慣習)、教育といった問題がある。西欧の学者達は、女性の権利に関して、イスラームに対して数々の非常に不当な非難を行なった。しかし、これらの非難は、実際には、西欧の学者達が考えたようにイスラームに当てはまるものではなく、それらの非難の的となっているのは、イスラームの法学者達が神の言葉の広範囲にわたる原則から行なった論証であり、これについては、個人的イジュティハード (ijtihad 法解釈) は宗教の不可欠の要素では決してないと言うことができるであろう。これらの非難はどれも、イスラームの宗教原理に従えば女性の地位は奴隸的である、としている。しかし、少し考えてみれば分ることであるが、人類の非常に大きな一団、すなわち奴隸を権利の点で主人と平等にした預言者に、人類のきわめて重要な要素を——それを預言者は自分の愛好する三つの物¹⁰⁾の中に含めたわけであるが——奴隸の姿にしてしまうことなどどうしてできたであろうか。ムスリムの現在の態度は、大部分、昔の法学者達の個人的な論証に基づくものであり、明らかに(それらの)論証は修正を必要としている。修正がイスラームの原則に反するものでない限り、これらの論証を現状に照らして修正するのは罪である——一体誰が言えよう

か。末梢的な問題は無視して、本質的な問題に目を向けてみよう。最も注意を要するのは婦人教育である。女性は本質的に全文明の根源である。「母」や「妻」という二つの言葉は美しく、宗教的、文化的美徳の全てがこれらの中に潜んでいる。もし、母への愛の中に祖国愛や民族（宗教集団）に対する愛情が隠れており、そこからあらゆる文化的美徳が結果として現われて来るとするならば、妻への愛は神への愛（ishq-e ilāhī）と呼ばれる熱情の始まりとなる。ともあれ、我々にとって肝要なのは、文明の根源に関心を払うこと、そして自民族（宗教集団）の女性を教育という宝石で飾ることである。男性の教育は単に一人の人間の教育であるに過ぎないが、女性に教育を与えるのは、事実上、全家族に教育を施すのと同じことである。世界の如何なる民族（宗教集団）といえども、民族（宗教集団）の半分が全く無知でいては進歩することなどではしない。しかし、これに関して一つの検討すべき問題が生じる。すなわち、東洋の女性に西欧流の教育を施すべきであるか、それとも、東洋に特有の上品な作法が保持されるような措置をとるべきであるか、という問題である。私はこの問題について熟考してみたが、未だに役に立つような結論に到達しておらず、今のところはこれについて何の意見も述べることができない。

一夫多妻制の慣習もまた改革の必要がある。これが正当視されたのには、無論、玄妙な精神的理由があった。また、初期イスラームにおいては経済的、政治的な面での必要もあった。しかし、私が理解している限りでは、現在のムスリムには一夫多妻制の必要は全くない。現在の状況でこれに固執することはムスリム（qaum）の経済状態に無頓着でいることであり、ムスリム（qaum）の上流階級の手に性的放縱の法的根拠を与えることである。

女性の権利に関しては、パルダーの問題もまた検討を要する。何故なら、しばらく前からこれについて活潑に議論が行なわれているからである。西欧文明の大きな影響を受けた一部のムスリムは、この慣習の激しい反対者であり、イスラーム初期や現在の他のイスラーム諸国においては今日インドで見られるような形のパルダーは見られない、と力説している。しかし、注意すれば分るように、インドでパルダーが特に強調されたのは、倫理的理由によるものであった。インド諸宗教集団（aqwām-e Hindustān）は倫理的にあまり進歩していないから、この慣習を一挙に廃止するのは、ムスリム（qaum）にとってきわめて有害であると思われる。無論、ムスリム（qaum）の倫理的状態が再びイスラーム初期のようになれば、パルダーをあまり強調しなくても済むようになるし、ムスリム（qaum）の女性達は自由にムスリム（qaum）の男性と意見を交換することができるようになるであろう。

以上のような改革の他、結婚にまつわるいくつかの悪習にもムスリム（qaum）は関心を向けなければならない。同意なしの結婚がムスリムの間で一般化しており、このため99%のムスリム家庭が夫婦間の不和に悩んでいる。結婚する前に、男女にそれぞれの年長者の前で会う機会が与えられた場合、婚約の慣習はきわめて有益なものとなり得る。こうすれば男女は互いの習慣や気質を知ることができるし、もし、両者の性格が全く合わないならば婚約は双方の意志によって解消されるであろう。しかし、残念なことに、現在の慣習では「気に入った女を娶れ¹¹⁾」（という

コーランの教え)に基づいて行動することなどできない。たとえ婚約以前から父となるべき人の家に入り込んでいたとしても、青年は婚約後はその家をまるで敬虔な人が酒場を避けるように避けなければならない。アフガン人の間では婚約後も男女は互いに会うことを許されるが、このムガルの慣習はイスラーム的ではなく、ユダヤ的であり、パターン人がユダヤ系であることを示している。明らかに、この(婚約という)慣習には数多くの欠陥がある。たとえば、婚約から結婚までの間に、一部のムスリム階層では多額の金銭が無意味に使われているし、毎日、内輪もめが起こったり、不平不満の声が上がったりしている。このため(婚約者)双方(の家)の間には最初から対立が生じ、その結果、婚約中の二人の将来の結婚生活は、大抵の場合、きわめて苦々しいものとなる。にもかかわらず、もし、改革が行なわれたならば、この慣習はきわめて有益なものとなり得ると私は思う。何故なら、これには西欧の求婚の慣習の美点が全てあり、その欠点の一つもないからである。民族(宗教集団)がかかえる様々な病の一つに、名声の飽くなき追求という病がある。これは我々の間に蔓延している病である。今、一つの示唆に富む笑い話を思い出したのでここで紹介しておくことにしたい。我々の町スィアールコード²⁾の近くのワズィーラーバード郡にケーサル・シャーという名の聖者が住んでいた。自由奔放な、奇跡を行なう行者であり、「存在の単一性論」(wahdat al-wujūd)に基づく瞑想法に通暁していた。付近の名士達は全て、ヒンドゥーもムスリムも、その弟子となっていた。或る日のこと、弟子の一人であった地主が一人息子の結婚式を終えて聖者を訪問し、顔を見るなり自慢話をし始めた。聖者は地主が出費についていちいち自慢するのを黙って聞いていた。すると一人の行者が聖者の前に現われ、聖者様、お食事の準備が整いました、と申し上げた。聖者は、ローティー(パンの一種)だけか、それともカレーもあるのか、と尋ねた。行者は、カレーはありません、と答えた。聖者は地主に、ちょっとバーザールに行って大根を買って来てくれないか、おかずが欲しいから、と言った。たまたま地主のポケットにはその時一文も入っていなかった。困惑した地主は、聖者の前にあった小銭を見てこう言った。「聖者様、その小銭を下さいませんか、今、持ち合わせがないものですから」と。聖者は言った。「息子の結婚式で得た名声で大根を一本買って来なさい。」地主は微笑み、こう言った。「聖者様、名声と引換えに食べ物や飲み物を手に入れることなどどうしてできるでしょうか。」聖者はいつもの軽妙な口調でこう言った。「一本の大根にも価しないような名声を得たところで何になるのかね」と。地主は大いに恥じ入り、自分の行ないを反省した。

文化改革の次に我々に必要なのは教育の普及である。ムスリムは一般に、教育の目的は大体において頭の訓練であると考えている。今日まで我々の指導者達が行なってきた教育活動はこのような考え方に基づいていた。しかし、私がこの問題について考察してみたところによれば、教育の真の目的は、その教化力によって青年に文化的義務を遂行する能力を備えさせることであると思われる。生まれつき高度な知的探究に向いている頭脳の成長を止めよ、と言っているのではなく、私が言わんとしているのは、民族(宗教集団)の教育は概して環境の変化によって生じた必要に基づくべきであるということである。イギリスは商業民族(の住む国)であり、ナポレオン

は常にこの民族を商人の民族と呼んでいた。しかし、歴史的に見ると、この言葉はナポレオンの時代には今日におけるほどには当てはまらないと思われる。この国は食糧の(…) ¹³⁾、そしてほとんど全ての原料を他国から得ており、いずれの場合も代金の代わりに他国に加工品を送っている。換言すれば、イギリスは一つの非常に大きな商店であり、そこから全世界の民族(宗教集団)は必要な物を買っているのである。このような状態のもとで、イギリスが特に必要としているのは、明らかに、商業活動を遂行し得る人間である。したがってこのような国では、教育は特に商才の開発をその目的としなければならない。具体的事実、イギリスがその民族教育においてこの点を念頭に置いてきたことを示している。現在、民族(宗教集団)の生存条件には驚くべき変化が生じている。私見によれば、その最大の特徴は産業と商業にある。アジア諸民族の中で日本人は初めてこの変化の意義を悟り、自国の産業を発展させるため努力を重ねた。それで、今日、この人々は世界の文明的諸民族の一つに数えられている。この卓越性は、日本人の間に優れた哲学者、詩人、文学者が生まれたことによるのではない。日本の偉大さは全て日本の産業によっているのである。

今日、世界の諸民族(宗教集団)の間で起こっており、いくつかの民族(宗教集団)には必ずやきわめて深刻な結果をもたらすであろう生存競争は、武装した兵士を必要とはしない。その兵士は静かに自分の国の工場で働く熟練工達である。今、或る民族(宗教集団)の力を知りたいと思うなら、その民族(宗教集団)の大砲や銃を調べてみる必要はない。その代わりに工場に行き、その民族(宗教集団)がどの程度外国に依存しており、どの程度自分の必要とする物を自分の力によって得ているかを見ればよい。このような状況を考慮に入れて、私は、インド人、特にムスリムは教育の如何なる分野にもまして技術教育 (*san'at ki ta'lim*) に力をそそぐべきであるという結論に到達した。具体的事実に基づいて私は確信をもってこう言うことができる。教育のこのきわめて重要な分野に関心を向けない民族(宗教集団)は、必ず衰退してゆき、遂には存在界にその痕跡すら留めなくなるであろう、と。しかし、残念ながらムスリムは特にこの点について無関心である。無関心の報いを受けるのではないかと私は不安である。私は産業や技術をムスリム (*qaum*) にとって必要欠くべからざるものと見做している。私の心の内を明かすならば、私の目には、手斧の常用で荒れた大工の手の方が、ペン以外の物の重さを感じたことのないすべすべした手よりも、はるかに美しく、また、有益なものに見えるのである。この点に関して、心の中にある様々な思いを私は言葉で表現することができない。このようなたどたどしい文章からは、私の胸中を十分に推測することはできないはずである。

心中にどんな嘆きがあるか、涙に聞いてはならぬ。

この涙滴に海のことなど分ろうか ¹⁴⁾。

註

1) 『コーラン』 洞穴の章83節以下参照。

2) 『コーラン』 家畜の章74節以下参照。

- 3) 『コーラン』部族連合の章72節参照。
- 4) 前半はここまで。
- 5) 『コーラン』信ずる人々の章10, 11節参照。
- 6) 一語意味不詳。恐らく「打擲する」という意味。
- 7) 『コーラン』雷鳴の章11節参照。
- 8) 原文ペルシア語。
- 9) 原文ペルシア語。
- 10) 残りの二つは礼拝と芳香。
- 11) 『コーラン』女人の章3節参照。
- 12) イクバルはパンジャブのシアルコート (Sialkot) 出身。
- 13) 原文にはchâr hisse とあるが、意味不明。「一部」という意味か。
.....
- 14) 原文ペルシア語。